

奈良県内の生地製造業は、自社で開発した独自性の高い生地を用いた販路開拓が続いている。最終製品の開発や自販にまで事業領域を広げるケースも見られる。
(酒井 要)

蚊帳地と蚊帳地使いウルでも販売先を獲得製品を製造する丸山織維産業(奈良県大里市)は、布巾などキッチン

フアブリックの自社ブランド「ならっぶ」の展開を強化している。国内向けでは奈良市内の自社直営店や加工施設での販売を広げてきた。

強みを生かし技術開発

2026年1月期の売上高は増収増益で、売上高の7割以上を自販事業が占めた。

丸山欽也社長は「OEMや産業資材の製販は供給責任があるものに絞っている。今後も主導権が取れる自販ビジネスを主軸にする」方針を示す。

近年は米州やアジア・オセアニア圏などで販売を広げている。現地の見本市出展を経て、現地企業への卸売を進めるケースが多く、25年には韓国・ソ

ックコットン使いなど採用を想定する。環境対応提案への関心が高い」と話し、仕向地地の好みに合わせた提案と生産設備の確保を重視する。

笹田織物(同田原本町)は今年2月に発表しした寝具向け生地の提案を継続している。生地は粗めに織り上げた後に起毛加工を施し、複数枚を重ねて縫い合わせる。柔らかな風合いが特徴で、ケット類やベビー用品などでの

丸山社長は「韓国はインクジェットプリントによる精細な柄物が支持を得た。ニュージーランドではオーガニックやベビー用品などでの

藤井幹晴社長は「基本的な物理作用を重視している」とし、繊維内での水分や空気の移動、状態変化を活用し、実際に使用した際の快適さを追求する。

引き続き機能提案を重視し、外注先の織布業との連携も生かした生地製造を進める。製法特許などを取得し、開発したノウハウを知的財産として保有する方針も示す。

ンと再生セルロース繊維を組み合わせた素材では、「紙と木でできて

「粗目織物製品では海外製生地も多い。『生地から奈良製』の存在感を市場でも高めていきたい」と話す。

編み地製造業の藤井(同橿原市)も最終製品まで視野に入れた生地の製販を進めている。

近年は寝具を中心とする住生活関連用品向けの機能提案を軸にしている。

奈良の生地製造業



見本市でのアピールを重視(丸山織維産業)

独自路線を追求

各社とも見本市を通じて卸売先を広げるほか、クラウドファンディングや自社EC体制の整備・充実も図る。